



日置農高 3年
木村美紀

「ボランティア活動」

地域を見つめ、思いはグローバルに！

私は、青春時代を日置町で過ごしました。というのは、私の母が日置町出身であるからです。高校三年間、祖父の家から通学し、楽しい毎日を送りました。その中でも、私にとって大切な思い出となっているのは、ボランティア活動です。

私とボランティア活動との出会いは、中学三年の夏のワークキャンプに始まります。思い起こせば、あの日私は、お年寄りとの触れ合いに胸はずませ、特別養護老人ホーム、恵光苑へと向かったのです。

もともと私は、お年寄りと接したり、話をするのは好きでした。この日も、ただ会うことだけを楽しみにして来

たのです。そして実際に、お年寄りの方々とお会いし、笑顔を見た瞬間、ああ、来てよかった、と思いました。こういうことがあって私は、高校に入学して迷わずボランティア部に入り、以来、今日まで活動しています。

次に、私の住んでいる、地域活動の一端を述べてみたいと思います。活動は、お年寄りとのふれ合いです。

ある時、独り暮らしのお年寄りのお宅を訪問しました。宅の周辺の、草刈りに行くのです。

車に道具を積んで、さあ出発です。着いた所は見るからに寂しいたずまいの、しかし、大きな大きな庭のある一軒家でした。

「おじいちゃん、おじいちゃん。」

と呼んでも反応はなく、私達の声は、広い家に淋しく、こだまするかのようでした。と、その時、耳の遠い、腰の曲がったおじいさんの姿が見えました。

そこで、私達は、早速分担を決め、作業の開始です。私の、ひざ程まで青々と育った草に思いっきり鎌を振りましました。ぼうぼうと繁った草を前にして、いつの間にか無口に

なっていました。ふと気がついた時には、庭はすっかりきれいになり、私達もやっと一息です。私達が休んでいるとおじいさんは、昔の事を話しかけられました。私はなぜか、心に温もりを感じたものです。私は、おじいさんとのふれ合いにより、気持ちのよい汗と満足感、そして、独り暮らしのお年寄りのことを思い浮かべ、一抹の淋しさを感じつつ、おじいさんの家を後にしたのでした。

梅雨が終わり、暑い夏の太陽が照りつける頃になると、今でも思い出されるのは、障害を持つ子供と健常児の、合同キャンプのお手伝いです。一生懸命に生き抜く障害児の力強さ、共に暮らす健常児の姿は、私の大切な宝物です。

このように、私達の活動は、地域と共に生きる活動です。

次に一昨年十月、韓国への修学旅行の時です。私達希望者は、ナザレ園を訪問しました。ナザレ園は、第二次世界大戦中、韓国青年と結ばれた、日本婦人の方が入っておられます。今は夫と死別し、身寄りもなくなり、体も弱っておられます。そうした人達の、生活保護をしている、韓国唯一の日系人保護施設が、ナザ

レ園なのです。

ナザレ園は、思っていたより静かな所にありました。私達が一歩足を踏み入れると、とても心待ちにしておられたように、大変にこやかに私達を迎えて下さいました。しかし、驚いたことに、このお年寄りの方々には、戸籍がないのです。韓国にも、日本にも、自分の生きている証がないのです。一度は、韓国青年に嫁ぐために去った故郷も、懐かしくないはずはありません。これも、戦争による悲劇なのです。二年前、ボランティアアクラブの先輩は、ナザレ園を訪問し、ネ、ウシ、トラに始まる十二支の物語を、人形劇で上演し、大変喜ばれました。一昨年私達は、大きな布に書いた小学校唱歌や、日本の動揺を歌いました。その時の声は、ナザレ園中に響きわたる、とても淋しい人達の声とは思えないほど大きな声だったのです。まるで、悔しさ、悲しみ、苦しみをはねのけるかのように思えました。そして、日本の行事の書き込まれた手作りの布のカレンダーを残して、園の方々による、蛍の光の歌声を背に、ナザレ園を去りました。修学旅行は私にとって、世界に目を向ける

きっかけとなりました。このように私の目指すボランティア活動は、まず地域に目を向け、独り暮らしのお年寄りと手を結び、障害者と共に語り、地域福祉に力を注ぐことです。これが私の、今一つの学び舎です。

そして、これから私達のように、二十一世紀に翔く若者は海外に目を向け、世界の若者と手をたずさえ、グローバルなボランティア活動を展開しようではありませんか。

今私は、看護婦を目指しています。持ち前の体力と積極性を生かし、患者さんはもちろんのこと、お年寄り、障害者の方の心の支えになれるような看護婦になりたいと思います。

鏡に映る顔を見ながら思った
もう悪口をいうのはやめよう
私の口から出たことばをいちばん近くで
聞くのは私の耳なのだから

花の詩画集 一鈴の鳴る道一より
星野 富弘 著